

# 楕円テータ関数の数値計算プログラム

2018.8.7 鈴木 実

## 1 はじめに

楕円テータ関数を直接計算する機会は珍しいと思われるが、ヤコビのテータ関数やヤコビの楕円関数の計算にはこの楕円テータ関数の計算が必要になる。その理由は、ノーム  $q$  による展開式を用いると、多くの場合  $q$  が十分に小さくなるために、収束が速くなるからである。

楕円テータ関数の数値計算は、「電子計算機のための数値計算法 III」[1] に述べられているように、ノーム  $q = e^{i\pi\tau}$  による展開式を用いる。ここに載せた C のプログラムは、同書の ALGOL のプログラムを C に変換したものである。このプログラムによる数値計算は 10 桁の精度をもつ。

## 2 計算式

### 2.1 楕円テータ関数 $\vartheta_i(v, q)$

楕円テータ関数の定義には教科書や論文により 2 種類見られ、それぞれの定義で変数は因数にして  $\pi$  だけ異なる。したがって、楕円テータ関数の周期は、変数の定義により、2 と  $\tau$ 、または、 $2\pi$  と  $\pi\tau$  の場合がある。そのような違いが一般に存在するので注意する必要がある。前者は寺澤寛一の「数学概論」[2]、岩波の「数学公式 III」[3]、山内二郎他の「電子計算機のための数値計算法 III」[1]、Hancock の “Lectures on the Theory of Elliptic Functions” [4] で使われ、後者の変数は、Whittaker and Watson の “A Course of Modern Analysis” [6] や Onsager の論文 [5] に見られる。

ここでは「電子計算機のための数値計算法 III」[1] のプログラムを利用しており、この本では前者の定義を採用していることから、この文章においても変数の定義は前者を用いる。すなわち、 $\pi$  は定義式に含めて変数には含めず、実数軸の周期は 2 または 1 である。

楕円テータ関数は次のように定義される。なお、 $\vartheta_4$  は  $\vartheta_0$  と書かれる場合もある。

$$\begin{aligned}\vartheta_1(v, q) &= 2 \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n q^{(n+\frac{1}{2})^2} \sin(2n+1)\pi v \\ &= 2q^{1/4}(\sin \pi v - q^2 \sin 3\pi v + q^6 \sin 5\pi v + \dots)\end{aligned}\tag{1}$$

$$\begin{aligned}\vartheta_2(v, q) &= 2 \sum_{n=0}^{\infty} q^{(n+\frac{1}{2})^2} \cos(2n+1)\pi v \\ &= 2q^{1/4}(\cos \pi v + q^2 \cos 3\pi v + q^6 \cos 5\pi v + \dots)\end{aligned}\tag{2}$$

$$\begin{aligned}\vartheta_3(v, q) &= 1 + 2 \sum_{n=1}^{\infty} q^{n^2} \cos 2n\pi v \\ &= 1 + 2q \cos 2\pi v + 2q^4 \cos 4\pi v + 2q^9 \cos 6\pi v + \dots\end{aligned}\tag{3}$$

$$\begin{aligned}\vartheta_4(v, q) &= 1 + 2 \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^n q^{n^2} \cos 2n\pi v \\ &= 1 - 2q \cos 2\pi v + 2q^4 \cos 4\pi v - 2q^9 \cos 6\pi v + \dots\end{aligned}\tag{4}$$

図1に、楕円テータ関数  $\vartheta_i(v, q)$  を実軸上  $0 \leq v \leq 4$  において  $q = 0.2, 0.5, 0.8$  の場合にグラフを示しておく。  $q$  が小さい時には  $\vartheta_1$  は  $\sin$  関数,  $\vartheta_2$  は  $\cos$  関数に近くなるが、振幅は  $q^{1/4}$  に比例して小さくなる。  $q$  が大きくなると、振幅が大きくなるとともに、振幅の羽根の部分狭くなる。

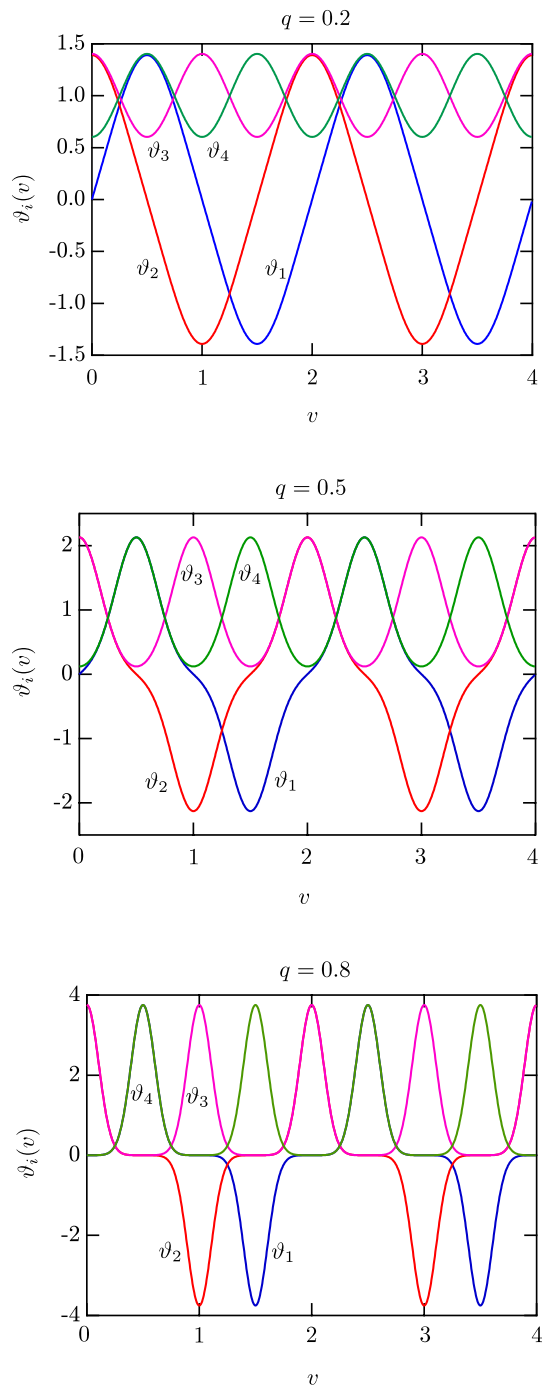


図1:  $v$  が実数のときの楕円テータ関数  $\vartheta_1(v, q)$ ,  $\vartheta_2(v, q)$ ,  $\vartheta_3(v, q)$ ,  $\vartheta_4(v, q)$ .  $q = 0.2, 0.5$ , および  $0.8$  の場合.

変数の範囲は次の周期性から 0 から 1 までで十分である.

$$\vartheta_1(v+1) = -\vartheta_1(v) \quad (5)$$

$$\vartheta_2(v+1) = -\vartheta_2(v) \quad (6)$$

$$\vartheta_3(v+1) = \vartheta_3(v) \quad (7)$$

$$\vartheta_4(v+1) = \vartheta_4(v) \quad (8)$$

また,

$$\vartheta_2(v) = \vartheta_1\left(v + \frac{1}{2}\right) \quad (9)$$

$$\vartheta_3(v) = \vartheta_4\left(v + \frac{1}{2}\right) \quad (10)$$

であるから, 計算は  $\vartheta_1(v)$  と  $\vartheta_4(v)$  の計算に帰着する. さらに,

$$\vartheta_1(v) = \vartheta_1(1-v) \quad (11)$$

$$\vartheta_4(v) = \vartheta_4(1-v) \quad (12)$$

の関係から  $\vartheta_1(v)$  と  $\vartheta_4(v)$  は  $v = 1/2$  を中心に対称であるから, 計算する変数の範囲は  $0 \leq v \leq 1/2$  でよい.

## 2.2 ノーム $q$ による展開式

$q$  が小さい時は収束が速いが, 大きくなると遅くなるので, 母数  $k$  から補母数  $k'$  に変えたときの  $q'$  を使うのが良い. 実際,  $k^2 \geq 1/2$  なら,  $k'$  に対応する  $q'$  のほうが  $q$  よりも小さくなる.  $q'$  は次のように与えられる.

$$q = e^{i\pi\tau} \quad (13)$$

$$\tau = \frac{iK'}{K} \quad (14)$$

$$\tau' = \frac{iK}{K'} = \frac{-K}{iK'} = \frac{-1}{\tau} \quad (15)$$

$$q' = e^{i\pi\tau'} = e^{-i\pi/\tau} = e^{\pi^2/\ln q} \quad (16)$$

$k^2 = 1/2$  のときは  $k^2 = k'^2$  となり, そのとき  $K = K'$  であるから,  $\tau = iK'/K = i$ , したがって,  $q = q' = e^{-\pi} = 0.043214\dots$  と十分小さくなり,  $k^2 = 1/2$  で切り替えれば  $q$  または  $q'$  はこの値よりも大きくなることはない. したがって,  $k^2 \geq 1/2$  のときは,  $k'$  に切り替えて,  $q'$  で展開した式を計算するほうが収束が速くなる.

しかし,  $\vartheta_i(v', q')$  を求めてから  $q(v, q)$  に戻るのは  $K'$  から  $K$  に戻るほど簡単ではない. 楕円テータ関数の場合は次に示すヤコビの虚数変換を用いる.

$$\vartheta_1(v, q) = i\sqrt{\frac{i}{\tau}} e^{-i\pi v^2/\tau} \vartheta_1\left(\frac{v}{\tau}, q'\right) \quad (17)$$

$$\vartheta_2(v, q) = \sqrt{\frac{i}{\tau}} e^{-i\pi v^2/\tau} \vartheta_4\left(\frac{v}{\tau}, q'\right) \quad (18)$$

$$\vartheta_3(v, q) = \sqrt{\frac{i}{\tau}} e^{-i\pi v^2/\tau} \vartheta_3\left(\frac{v}{\tau}, q'\right) \quad (19)$$

$$\vartheta_4(v, q) = \sqrt{\frac{i}{\tau}} e^{-i\pi v^2/\tau} \vartheta_2\left(\frac{v}{\tau}, q'\right) \quad (20)$$

ここで,  $c = K/K'$  とおく. そうすると,

$$c = \frac{K}{K'} = \frac{i}{\tau} = \frac{-\pi}{\ln q} = \frac{\pi}{\ln(1/q)} \quad (21)$$

である.  $v' = vc$  とすると, 式 (18) および式 (20) は,

$$\begin{aligned}\vartheta_1(v, q) &= ic^{1/2} e^{-\pi v^2 c} 2q^{1/4} (\sin[\pi v'/i] - q'^2 \sin[3\pi v'/i] + q'^6 \sin[5\pi v'/i] - \dots) \\ &= c^{1/2} e^{-\pi v^2 c} 2q^{1/4} (\sinh \pi v' - q'^2 \sinh 3\pi v' + q'^6 \sinh 5\pi v' - \dots)\end{aligned}\quad (22)$$

$$\begin{aligned}\vartheta_4(v, q) &= c^{1/2} e^{-\pi v^2 c} 2q^{1/4} (\cos[\pi v'/i] + q'^2 \cos[3\pi v'/i] + q'^6 \cos[5\pi v'/i] - \dots) \\ &= c^{1/2} e^{-\pi v^2 c} 2q^{1/4} (\cosh \pi v' + q'^2 \cosh 3\pi v' + q'^6 \cosh 5\pi v' - \dots)\end{aligned}\quad (23)$$

となる.

$e^{-\pi v^2 c} = e^{(-i\pi/\tau)v^2} = q'^{v^2}$  であること, および  $e^{\pi v'} = e^{\pi cv} = q'^{-v}$  であることに注意すると,

$$\begin{aligned}\vartheta_1(v, q) &= \sqrt{\frac{\pi}{\ln(1/q)}} q'^{v^2+1/4} \{(q'^{-v} - q'^v) - q'^2(q'^{-3v} - q'^{3v}) + q'^6(q'^{-5v} - q'^{5v}) - \dots\} \\ &= \sqrt{\frac{\pi}{\ln(1/q)}} q'^{v^2-5v+1/4} \{(q'^{4v} - q'^{6v}) - q'^2(q'^{2v} - q'^{8v}) + q'^6(q'^0 - q'^{10v}) - \dots\} \\ &= \sqrt{\frac{\pi}{\ln(1/q)}} q'^{v^2-5v+1/4} \{(z^2 - z^3) - q'^2(z - z^4) + q'^6(1 - z^5) - \dots\}\end{aligned}\quad (24)$$

$$\begin{aligned}\vartheta_4(v, q) &= \sqrt{\frac{\pi}{\ln(1/q)}} q'^{v^2+1/4} \{(q'^{-v} + q'^v) + q'^2(q'^{-3v} + q'^{3v}) + q'^6(q'^{-5v} + q'^{5v}) + \dots\} \\ &= \sqrt{\frac{\pi}{\ln(1/q)}} q'^{v^2-5v+1/4} \{(q'^{4v} + q'^{6v}) + q'^2(q'^{2v} + q'^{8v}) + q'^6(q'^0 + q'^{10v}) + \dots\} \\ &= \sqrt{\frac{\pi}{\ln(1/q)}} q'^{v^2-5v+1/4} \{(z^2 + z^3) + q'^2(z + z^4) + q'^6(1 + z^5) + \dots\}\end{aligned}\quad (25)$$

となる. ただし,  $z = q'^{2v}$  である.

結局, 数値計算する式は  $k^2 \leq 1/2$  のときに, 式 (1) と (4) を,  $k^2 > 1/2$  のときに式 (24) と (25) を用いる. プログラムは  $q$  が与えられた場合を考えているが,  $k$  が与えられた場合は別途  $q$  を計算する必要がある.  $k$  から  $q$  への計算は, すでに前のエントリーで述べた [7].

## 参考文献

- [1] 山内二郎, 宇野利雄, 一松信, 「電子計算機のための数値計算法 III」 (培風館), 1971 年, p.258.
- [2] 「自然科学者のための数学概論 [増訂版]」 1954 年 (岩波書店).
- [3] 森口繁一, 宇田川金圭久, 一松信, 「数学公式 III」 (岩波書店), 1960 年.
- [4] Harris Hancock “Lectures on the theory of elliptic functions”  
ダウンロード URL,  
[https://openlibrary.org/works/OL5730167W/Lectures\\_on\\_the\\_theory\\_of\\_elliptic\\_functions](https://openlibrary.org/works/OL5730167W/Lectures_on_the_theory_of_elliptic_functions)
- [5] Lars Onsager, “Crystal Statistics. I. A Two-Dimensional Model with an Order-Disorder Transition”, Phys. Rev. **65**, 117-149 (1944).  
ダウンロード URL,  
[http://www.colorado.edu/physics/phys7230/phys7230\\_sp08/Onsager1944.pdf](http://www.colorado.edu/physics/phys7230/phys7230_sp08/Onsager1944.pdf)
- [6] E. T. Whittaker and G. N. Watson, “A Course of Modern Analysis”, 4th Edition Cambridge Mathematical Library, Cambridge University Press, Internet ArchiveOpen Library,  
ダウンロード URL,  
<https://ia802704.us.archive.org/11/items/courseofmodernan00whit/courseofmodernan00whit.pdf>

[7] 「第1種および第2種完全楕円積分の数値計算プログラム」(2017/8/3のエントリー)

[http://totoha.web.fc2.com/Complete\\_Elliptical\\_Integral.pdf](http://totoha.web.fc2.com/Complete_Elliptical_Integral.pdf)

## プログラムソース

以下のプログラムでは、楕円テータ関数の関数サブプログラム THETA(I, v, q) である。計算は、 $k^2 = 1/2$  に相当する  $q = 0.043$  で計算式を切り替えている。I=1, 2, 3, 4 で  $\vartheta_i(v, q)$  ( $i = 1, 2, 3, 4$ ) が返ってくる。

使い方は、main() のようにすれば良い。計算結果は、周期が  $2\pi$  または  $\pi$  の場合である。

```
/* THETA.c */
// provides values for the four elliptic theta functions
// converted from the ALGOL program in the textbook 電子計算機のための数値計算法 III p.267
// M. Suzuki 2018.6.21

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <math.h>

double THETA(int I, double v, double q)
{
    double w, q2, q3, q6, lnq, qbis, plq;
    double theta;
    double pi=3.14159265359;
    double doub_pi=6.28318530718;
    int S;

    if(I==2) v+=0.5;
    if(I==3) v-=0.5;
    if(I==1 || I==2)
    {
        S=(v>0)-(v<0);
    }
    else
    {
        S=1;
    }
    v=fabs(v);
    while(v>1)
    {
        v-=1.0;
        if(I==1 || I==2) S*=-1;
    }
    if(I==1 || I==2)
    {
        if(q==0 || v==0)
        {
            theta=0;
            return theta;
        }
    }
    else
    {
        if(q==0)
        {
            theta=1;
        }
    }
}
```

```

        return theta;
    }
}
if(q>0.043) /* IMAG */
{
    lnq=log(q);
    plq=9.8690440109/lnq;
    qbis=exp(plq);
    q2=qbis*qbis;
    q6=q2*q2*q2;
    if(v>0.5) v=1.0-v;
    if(I==1 || I==2) w=-exp(2.0*v*plq); else w=exp(2.0*v*plq);
    theta=S*(1.7724538509/sqrt(-lnq))*exp((v*v-v+0.25)*plq);
    theta*=((((q6*w+q2)*w+1.0)*w+1.0)*w+q2)*w+q6)/w/w;
    return theta;
}
else
{
    if(I==1 || I==2) /* TH1 */
    {
        w=pi*v;
        q2=q*q;
        theta=2*S*sqrt(sqrt(q))*((sin(5.0*w)*q2*q2-sin(3.0*w))*q2+sin(w));
        return theta;
    }
    else /* TH4 */
    {
        w=doub_pi*v;
        q2=q*q;
        q3=q2*q;
        theta=2.0*((-cos(3.0*w)*q2*q3+cos(2.0*w))*q3-cos(w))*q+1;
        return theta;
    }
}
}
}

```

```

int main()
{
    FILE *fp;
    double v, dv, q, x, z;
    double pi;
    int i, j, n;
    pi=M_PI;
    n=800;
    q=0.8;
    dv=4.0/n;
    char *filenameout="theta_0.8.txt";
    fp=fopen(filenameout, "w");
    for(i=0;i<n;i++)
    {
        v=dv*i;
        printf("%lf\t%lf\t", v, v*pi);
        fprintf(fp, "%lf\t%lf\t", v, v*pi);
        for(j=1;j<5;j++)
        {
            z=THETA(j, v, q);
            printf("%lf\t", z);
            fprintf(fp, "%lf\t", z);
        }
        printf("\n");
        fprintf(fp, "\n");
    }
}

```

```
    }  
    fclose(fp);  
}
```